

# 大過去と背景知識\*

## Plus-que-parfait et savoir à partager

岸 彩子

KISHI Ayako

Abstract : D'après Barceló et Bres (2006) et Watanabe (2018) , le plus-que-parfait peut former une phrase événementielle, qui traduit un procès déterminé dans un point sur l'axe temporel, et qui peut avancer, dans un récit, la narration. Ainsi, selon eux, une série de plus-que-parfaits fait avancer l'histoire, comme le fait celle du passé simple ou du passé composé, et constitue « la narration en arrière plan ». Or, la nature de cette dernière n'est pas évidente.

Nous formulons l'hypothèse que le plus-que-parfait ne forme jamais une phrase événementielle. Cela vient de l'idée comme suit; le plus-que-parfait demande toujours de prendre en considération de deux points temporels: le point de référence ( $t_1$ ) et le moment où se situe le procès exprimé par le participe passé ( $t_2$ ) . C'est de ce point-là que se différencie le plus-que-parfait du passé simple ou du passé composé, qui, lui, exprime un procès comme événement. Le plus-que-parfait, au lieu de montrer comme un événement le procès qu'il décrit, le montre comme un savoir (s) qui doit (doivent) être partagé (s) pour comprendre la situation de  $t_1$ .

keyword : plus-que-parfait, domain of discourse, perception / savoir

---

\* 本稿は日本学術振興会科学研究費（基盤研究（B）課題番号18H00677「ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンスシャリティの対照研究」研究代表者：山村ひろみ）の補助を受けた研究成果の一部である。

## 1. はじめに

### 1.1 点過去／線過去

物語は通常、過去時制で語られ、語りを進めるのは多くの場合、単純過去または複合過去が担っている。次の例では、単純過去で語りの時間が進められている。半過去は同時性を表し、時間を進めてはいない。

例1) Il referma sur lui la grille du petit cimetière et remonta la rue principale du bourg. Depuis les fenêtres entrouvertes lui parvenaient les bruits familiers du repas qui s'apprête. Gaston pressa le pas. (Chatelet *Histoires de bouches*)

この例のように、通常語りの中に現れる時制は、語りを進めるものと、同時性を表し、状況を描写するものに分けられる。これは、過去時制が、点過去／線過去に分かれることと重なる。例外的な用法が見られるにせよ、単純過去、複合過去と半過去が、それぞれ点過去、線過去に相当すると考えてよいだろう。

では大過去はどのようなのだろうか。フランス語では、大過去が連続して出現することが、他のロマンス語諸語と比べて多いことが渡邊 (2018a) で指摘されている。

例2) Jusqu'à midi, Sévrine avait dormi profondément. Ensuite, réveillée, surprise de ne pas le voir là encore, elle avait rallumé le poêle ; et, vêtue enfin, mourant d'inanition, elle s'était décidée, vers deux heures, à descendre manger dans un restaurant du voisinage. (Zola *La Bête humaine*)

大過去の連なりは、物語を進めるのか。そうだとすればなぜ単純過去、複合過去を用いないのか。大過去は単純過去、複合過去とはどこが違うのか。

本稿では、上記の考察を通して、大過去の意味機能に関して統一的な説明を与えるを試みる。本稿は、主に語りrécitの文脈での大過去の用法を扱う。本稿の構成は以下のようである。まず、大過去は出来事性を失い、属性・状態を表すことを見る。ついで、「領域」という概念を導入し、語彙の意味の「出来事」から「状態・属性」を表すようになる仕組みが、領域の採り方の相違で説明できることを見る。そして、時間性のない領域で、常に $t_1$ と結びつけて解釈され、大過去は、 $t_1$ での状況、 $t_1$ に関する知識、 $t_1$ の特徴となる属性を表すと主張する。

## 1.2 二種類の文 出来事文／属性付与文

大過去の用法を見る前に、まず、文には、大きく分けて出来事を表すものと、属性を表すものの二種類あるという点を確認しておきたい。これは、過去時制では、点過去／線過去のように区別され、フランス語ではそれぞれ、点過去は単純過去または複合過去、線過去は半過去に相当する。複合過去に置かれた「*Paul a fumé une cigarette.*」は、「ポールは一本タバコを吸った」のように一時点に定位される点的事象を表し、半過去「*Avant Paul fumait.*」は「以前、ポールはタバコを吸っていた」という、一時点に限られない、比較的長い時間的スパンでの事態を表している。これはCarlson (1980) のstage-level述語文、individual-level述語文の区別と重なる。図1で●で示した $t_1$ は一時点に限定されたstageである。stage-level述語文が「今・ここ」など一時点だけのことを述べる文なのに対し、individual-level述語文は、「喫煙者である」のように、個体としてのポール全体について有効な属性を述べている。それぞれ一時点に切り取られた存在であるstageか、または時間に限定されない個体individualを主語に取る。この対立はまた、出来事文／属性付与文の対立でもある。本稿で「出来事文／属性付与文」と呼ぶのは、それぞれstage-level述語文、individual-level述語文でもある。

この対立の重要な点は、一時点で区切られているか、否かである。出来事文はその一時点でのみ成立する、例えば「ポールがタバコを吸っている」という事態を言うもので、生起時点の情報は不可欠である。だが、属性付与文は、ポールのどの時点をとっても成立するものとして「喫煙者」と言っており、相対的に一時点の重要性は低くなる。またポールがタバコを吸っていない時点があっても、「ポールは喫煙者だ」は真であり続ける。属性付与文においては、時間性は薄いということが言える。

出来事文／属性付与文は、また、知覚可能な事態かそうでないか (VOIT Ipv E / SAIT Ipv P (Vogeleer 1994他)) でも分けることができる。このことについては後述する。

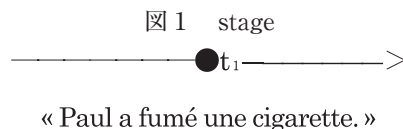
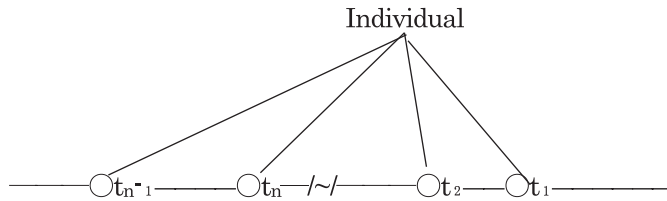


図2 Individual



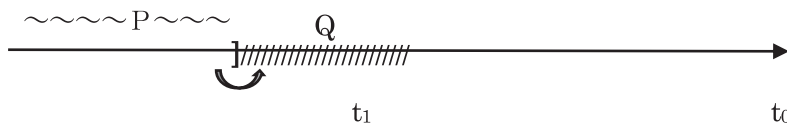
« Paul fume. (=Paul est fumeur). »

## 2. 先行研究

### 2.1 渡邊 (2018b)、Barceló et Bres (2006)

渡邊 (2018b) では、大過去が図3のように図示され、次のように説明されている。「～～P～～が過去分詞におかれた動詞が指す事行であり、]がその終端である。////で示したのがPが尽くされた以降の結果状態Qである。過去分詞はPからQへの移行（図中では弧状の矢印で示されている）をあらわす。t<sub>0</sub>が発話時、t<sub>1</sub>が過去時であり、助動詞の半過去形によって視点PDVがt<sub>1</sub>におかれていることが示される。PDVはQの中途のみを対象とする。」「大過去は、Pの結果状態Qを指示するという点で、結果残存型の完了相である。しかし同時にQの中途のみを問題としているという意味では未完了相であり、完了・未完了の両方の性質をかねそなえた形式である。」(渡邊2018b)。

図3



渡邊 (2018b) では、大過去の用法として、完了を表すもの、先行性を表すもの、叙想性を表すものの3つが挙げられている。これらは線過去と点過去に分けられる。結果状態を表す完了、叙想性は線過去であり、先行性は「事態の生起そのものに注目する」出来事文、すなわち点過去であるとされる。

まず線過去である、完了と叙想性を見る。完了は、例3の下線部のように、事態t<sub>2</sub>が完了した

後の結果状態を表す代表的な用法である。t<sub>1</sub>の時点（視点の置かれる時点）でその状態が中途であるという意味で未完了アスペクトである。大過去*avait séjourné*は「水に浸かっていた」ことではなく、その結果の状態を表す。また*avait pris*は「黄色味を帯びた」事態そのものではなく、その後の黄色くなった状態を示している。どちらも図3のQに相当する線過去である。

例3) Camille était ignoble. Il avait séjourné quinze jours dans l'eau. Sa face était encore ferme et rigide; les traits s'étaient conservés, la peau avait seulement pris une teinte jaunâtre et boueuse.

叙想性は、語彙の意味が点的な完了アスペクトであるものも、未完了のように捉え直されるものである。この用法も結果状態を表し、線過去といえる。次の例の中ほどの斜字体、*trouver*「見つける」、*envoyer*「使いにやる」は、語彙の意味はいずれも一回的な点的事象であるが、大過去に置かれたことで「見つけている」、「使いにやっている」のように未完了に捉え直される。これらは「説明の大過去」とも呼ばれる。

例4) Aussi discrètement que possible, Scotland Yard tenta d'éclaircir les rumeurs lui attribuant une liaison avec la fille du médecin ; mais il apparut qu'après avoir été très liés, ils s'étaient brouillés brusquement deux mois auparavant, et ne s'étaient pas revus depuis. Quant au médecin, homme d'un certain âge et au-dessus de tout soupçon, il fut abasourdi en apprenant le résultat de l'autopsie. Appelé aux alentours de minuit, il avait trouvé trois personnes indisposées. Mesurant aussitôt la gravité de Mme Jones, il avait envoyé chercher au dispensaire des pilules opiacées pour alléger ses souffrances. Cependant, en dépit de ses efforts, la malheureuse avait succombé sans qu'il eût un instant soupçonné quoi que ce soit. Il était convaincu que sa mort était due à une forme de botulisme. Le dîner s'était composé de homard en conserve, salade, fromage, pain et pudding. Par malheur, le homard avait été mangé jusqu'à la dernière miette, et la boîte de conserve jetée aux ordures. Il avait interrogé la jeune bonne, Gladys Linch. Non sans peine car elle était bouleversée, agitée et larmoyante. Mais elle n'avait pas cessé de répéter que la boîte n'était pas déformée et que le homard lui avait paru tout à fait bien.

« Tels étaient les faits sur lesquels nous devons nous appuyer. [...] »

先行性は「出来事を表す」とされている用法である。Barceló et Bres (2006) ではフラッシュバック *analepse* と呼ばれており、出来事を表し、基本的には単純過去と入れ替え可能であるもの

とされている。

例5) Jaques *regarda* sa montre, *vit* qu'il était quatre heures déjà ; et, il *se hâta* de retourner à l'impasse d'Amsterdam. Jusqu'à midi, Sévrine avait dormi profondément. Ensuite, réveillée, surprise de ne pas le voir là encore, elle avait rallumé le poêle ; et, vêtue enfin, mourant d'inanition, elle s'était décidée, vers deux heures, à descendre manger dans un restaurant du voisinage.

渡邊 (2018b) によれば、このような先行性の大過去は、出来事の生起そのものに注目するものである。また、大過去の中心的用法である結果状態を表すものからの派生的用法で、「結果状態があるということは、その前に事態がなされたのであろう」という推測から、間接的に完了が表されると説明される。このような大過去の連なりは、「主たる語りとは異なる」り、単純過去の主たる語りを一段目の語りとする「二段目の語り」を構成するとも説明されている。渡邊 (2018b) は、上の例5に加え、次の例6を大過去が「物語の前景」を語る例として挙げている。

例6) Évidemment, j'avais posé des questions aux pêcheurs, à tous ceux qui avaient été témoins de l'accident. Une femme m'avait raconté une histoire bizarre à laquelle je n'avais pas prêté attention sur le coup, mais qui me revint plus tard. Elle prétendait qu'au moment où elle avait hélé son amie, Mlle Durant n'était pas en difficulté. D'après elle, l'autre l'aurait rejointe et lui aurait délibérément maintenu la tête sous l'eau. Comme je vous l'ai dit, je n'avais pas fait très attention à cette histoire. C'était si extravagant et, vues de la plage, les choses peuvent paraître si différentes ! Mlle Barton avait peut-être tenté de faire perdre conscience à son amie en voyant que celle-ci allait les faire couler toutes les deux dans son affolement.

## 2.2 問題点

上記の先行性については二つ疑問が起こる。一つは「主たる語りとは異なる」「二段目の過去」の語り、「フラッシュバックの語り」とはどのようなものかということである。フラッシュバックを前景として語っていくと、一段目の語り、普通の語りと同様になるように思われる。実際、遡行した時点に視点が移り、そこが起点となって新たな基調の語りとなることもある。二段目の語りが、通常の語りと違うのであれば、どのように違うのか。

二つめの疑問は次のようなことである。先行性は「結果状態があるということはその前に事態がなされたのであろう」という推測から、間接的に完了が表されることになる」と説明されている。

叙想性に関しては、完了→未完了への「捉えなおし」が大過去によって行われると説明されていた（点過去→線過去）<sup>1</sup>。翻って、先行性では、推測によってにせよ、完了、全体的アスペクトへ（線→点）と説明される。互いに逆方向へ向かう転換を、両方とも担うと考えるのは無理があるのではないか。

出来事を表すとする先行性には、このような疑問が残る。大過去の述べ方は、出来事を生起順に述べるのとは異なる述べ方ではないのか。

### 3. 大過去は出来事を表さない

#### 3.1 大過去が共起しない時間表現

大過去が出来事を表さないことは、次の各表現との共起不可能性に現れている。

例7a) *Aussitôt que* le feu [a pris / ?? avait pris] il a vu la fumée

「炎が上がると直ちに、彼は煙を見た」

例7b) *Dès qu'*elle [a fini / ?? avait fini] ses devoirs, elle est sortie.

「宿題を終えるや否や、彼女は外出した」

大過去は*aussitôt que*「～すると直ちに」、*dès que*「～するや否や」の後に出現しない。これらはどちらも、二つの「出来事」(A, B)の時間的な隣接関係を述べる時間表現である。時間軸上の一点に定位されるということを「時間性がある」「時間性+」と呼ぶとすると、「*Aussitôt que* A, B」の場合、A, Bどちらにも時間性+を要求する。これらの表現の後には、出来事しか出現できない。一点に位置づけられなければ、前後関係を言うことはできないからである。「炎上がる」も「煙を見る」もどちらも定位されたのちに、比較が可能になる。

また、AとBはどちらかがどちらかに従属するのではなく、対等なレベルに置かれた出来事であればならない。「炎上がる」も「煙を見る」もそれぞれ独立した事象で、どちらかがどちらかに従属するという関係はない。各々別個に定位され、対等な位置に置かれている。

大過去はこの位置に出ることはできない。このことから、大過去が表すのは時間軸上の一点に定位される事象、すなわち出来事ではなく、また大過去<sub>t2</sub>は他の時点に従属していると考えられる。

### 3.2 大過去は中心場面を設定しない

東郷（2018）では、次のような指摘がなされている。「大過去は中心場面を切り替えない。大過去があるからといって、中心場面が過去方向に移動することはない」、「『大過去が他の時制が表す出来事に後続する出来事を表すことがある』という朝倉<sup>2</sup>の指摘はまちがいである」。大過去は出来事を表すものではないということになる。

東郷（2018）の指摘は、デクラーク（1994）を受けたものである。デクラーク（1994）では「中心場面」という概念が用いられている。

「ある場面が、もう一つの場面に先行するか、同時的であるか、後行するか、という観点から捉えられている場合、前者は後者に時間的に従属している（temporally subordinated to）、あるいは時間的に束縛されている（temporally bound by）という。[...] 時間の支配領域を定める場面を、その支配領域の中心場面（central situation）と呼ぶ。中心場面は、その支配領域内で、唯一、別の場面に従属していない場面である。」（デクラーク1994 強調岸）

下の例の場合、中心場面はsaidが設定する。他のwas pleased、had sent、would writeはこれに従属する。

例8) Jim said that he was pleased that Bill had sent him a letter and that he would write a reply as soon as possible.

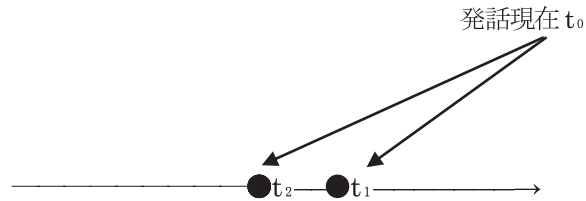
このような「中心場面」を大過去が設定することはない。大過去は常に別の場面に従属して解釈される。大過去は、単独で自立した事態を時間軸上に定位することはない。下の例で大過去が容認されず、複合過去が用いられるのは、「扉を開けた（ $t_2$ ）」と「外出した（ $t_1$ ）」のどちらも、物語の時間を進められる、別個の中心場面を構成する出来事二つであることによる。

例9) Il { ??avait ouvert/ a ouvert } ( $t_2$ ) la porte et il est sorti ( $t_1$ )

上記のことはまた、次のようにも説明できる。複合過去、または単純過去は中心場面を設定できる。下の図4の複合過去の文は、いずれも単独で過去の出来事を表し得る。 $t_2$ 、 $t_1$ はそれぞれ別個の中心場面を過去領域に設定する。

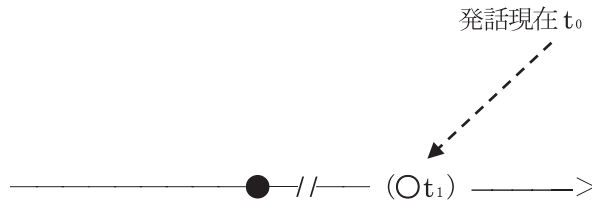


図4 Le feu a pris ( $t_2$ ) 「炎が上がった」  
 Il a vu la fumée ( $t_1$ ) 「彼が煙を見た」  
 独立した二つの事態。それぞれ $t_0$ から直接定位される（出来事）



大過去に置かれると基準となる $t_1$ を仲介することになる。発話現在時 $t_0$ から直接にはアクセスできず、したがって他の事態との比較もできない。\**Aussitôt que le feu avait pris, il a vu la fumée.*はこのような理由で非文となる。

図5 Le feu avait pris ( $t_2$ ) ( $t_1$ 不明のため、定位されない)



### 3.3 基準時 $t_1$ の重要性

ここで、大過去解釈における、時点 $t_1$ の重要性が確認される。大過去が、従属してのみ、ある事態を表すことが可能なのであれば、従属する先である $t_1$ は不可欠である。大過去には、二つの時点が関わるが、言表にある $t_2$ （過去分詞が表す事態の生起時点）のほかに、常に $t_1$ が隠れており、その $t_1$ のもとに $t_2$ は置かれているということになる。

図6



大過去は、 $t_1$ に従属するものとして、 $t_2$ を表す。

ところが次の「冒頭の大過去」と呼ばれる例は、このことの反証のように見える。

例10) Monsieur Dupont, exporteur de dentelle, avait établi sa maison de commerce à Bruxelles. Il habitait dans une maison de banlieue près de la ville. Monsieur Dupont menait une vie honorable mais il n'avait jamais de chance. Il est évident que c'était vraiment l'homme le plus malchanceux du monde. (J.K. Phillips *Contes sympathiques* cité dans 東郷2011)

下線の大過去には、 $t_1$ に相当する事態が先行していない。このことから、単独で出来事を表しているように見えるかもしれないが、そうではない。このような冒頭に出る大過去の場合には、「後から何らかの事件が起き、物語が進み始めるだろう」という期待を抱かせる効果がある。この「何らかの事件」が $t_1$ として働くことになる。

大過去には必ず $t_1$ が示されなければならない。この提示が大過去出現までにない場合には、後で提示されるものと推測し、読者はそれを待つことになる。大過去（及び半過去）だけが出ているうちは、読者は、物語はまだ進み始めていないと感じる。背景状況が述べられているにとどまるからである。

大過去は中心場面を設定しない。大過去は出来事を表さず、また大過去 $t_2$ は基準時 $t_1$ と従属関係にあるということができる。

#### 4. 領域

前節では、大過去が出来事を表さないことを確認した。では渡邊（2018）で「全体的アスペクトに擬似的に近づく」、「物語の前景を語る」とされ、出来事を表すとされていた、「先行性」、「フラッシュバック」の大過去はどのように考えればよいか。また「説明の大過去」に見られる叙想性への捉え直しはどのようになされるのか。領域という考え方が有効であるように思われる。

##### 4.1 領域 Domain of discourse

文が解釈される時、考慮に入れるべき範囲は限定され、その範囲は予め話者—聞き手間で共有されている。Recanati (1996) では「量量子が関連付けられるのが、ある世界全体とではなく、その一部分だけであるように、文もある「談話の領域」domain of discourseと相対的に解釈され

る」とされている。

Domain of discourse (Recanati1996)

So we see that utterances, like quantifier phrases, are interpreted relative to some partial contextually determined domain of discourse rather than to a fixed, total world. (強調岸)

domain of discourseは解釈時に考慮に入れるべき時間的・空間的範囲である。以下ではdomain of discourseを「領域」と略す。例えば次の例11は、「生まれてから今までに朝ご飯を食べたことがある」ではなく、「今日の朝ご飯を食べた」と正しく解釈されるが、この場合の領域は「今日」である。

例11) I've had breakfast (this morning) .. (Recanati 2004)

領域：「今日」

例12には二種類の解釈が可能だが、これは二種類の領域が想定されることによる。

例12) Paul fume.

一つは一時空に限定されるt領域である。ここで解釈されることで時間性を持つことになり（時間性+）、「（今ここで）ポールがタバコを吸っている」と出来事解釈される。もう一つの非t領域は、一時空には限定されない。複数の時空を、お互いの差を捨象して扱う領域である。「ポールは喫煙者だ」という解釈がなされる領域は、ポールが喫煙者である間の時間全体で、ポールの一生の間でもあり得る。非t領域では、文は属性解釈される。

この対立は「出来事文／属性付与文」の対立に重なり、また「知覚可能な事態として表すか、そうではなく、知識として表すか」の対立とも重なる。Vogeleer (1994他) では、文が知覚を表すものと知識を表すものに分けられている。

知覚を表す文／知識を表す文 (Vogeleer (1994) , Vogeleer & De Mulder (1998))

VOIT (I<sub>pv</sub> E)

SAIT (I<sub>pv</sub> P)

I<sub>pv</sub> : 情報にアクセスする視点の持ち主

E : événement, état ... 知覚可能 (知覚主体の想定が可能)

P : proposition « une représentation conceptuelle structurée » ... 知覚は不可能

E (= 出来事) が知覚VOITの項になっており、命題Pが「知る」SAITの項になっているのは、出来事を見ることができるが、知ることはできない、命題は「知る」ことはできても見ることはできないということを反映している。知覚は、知覚主体が見える時間的・空間的範囲、すなわち一時空に限られるが、知識は、いつでも記憶から取り出して参照できるので、時間的拘束を受けない。

知覚の文はt領域で、知識の文は非t領域で、それぞれ解釈される。

知覚を表す文の領域は一時空に限定される。二時空以上を同時に知覚することは不可能だからである。このような文は「見たまま」を言うものである。出来事は一時空に限定された領域 (t領域) で解釈されると言える。

これに対し、知識を表す文の領域は非t領域である。知覚がその場で見た出来事を言うのに対し、知識は、知覚の「その場」である一時空から離れて捉えられている。知覚由来であっても、「このような出来事が存在する」は命題であり、知識として表し得る。命題は、テーマについて何らかを述べるものであるから、非t領域はテーマによって限定されると言える。

二つ以上の出来事を関係づけるのも知識の述べ方である。一時空を超えたものは出来事 (= 誰かが知覚できるもの) ではなく、知識である。知識として表されれば、一時空の限定は無くなり、時間性は重要ではなくなる<sup>3</sup>。出来事ではなく、知識、属性として表されると生起時点は情報の一つに過ぎなくなる。知覚を表す文においては生起時点の情報が本質的であり、不可欠だが、知識は記憶内に格納されておりいつでも参照可能なので、一時点に束縛されない。この意味で、属性付与文には時間性は無くなると言える。

#### 4.2 大過去の領域

3節で見たように、大過去 $t_2$ は基準時 $t_1$ に従属する。大過去は、過去分詞が表す事態の生起時 $t_2$ と、中心場面となる $t_1$ を、同時に考慮に入れて解釈される。つまり、二時点以上を含む領域、すなわち非t領域で解釈されていることになる。ここで解釈される文は属性解釈を受ける。また3節では、大過去が出来事を表さないことも見た。このことから、大過去は、基準時 $t_1$ に関連する知識、属性を表すと考えることができる。以下では、このことを検証する。

まず叙想性 (説明の大過去) の領域を考える。前出のように、この用法については「物語の背景をなす事情や理由は、たとえ元来は動的な事態であっても、ことがらが帯びる性質のように、

状態的にとらえなおされる」(渡邊2018b)とされている。このような捉え直しの仕組みは、領域の概念を用いると、語彙的意味からは出来事と捉えられやすい(=t領域で解釈されやすい)事態が、大過去形に置かれていることで、知識と捉える非t領域で解釈されることによると説明することができる。これはまた、時間性(一時点性)、一回性、出来事性を、非t領域に入れることでキャンセルし、判断の材料(=知識)として提示すると言い換えることもできる。一回的な事態 $t_2$ を「 $t_1$ の背景知識としては、 $t_2$ のような事態がある」と捉え直すところに叙想性が生じる。

次の例13(=例4)では、非t領域が太字のTels étaient les faits sur lesquels nous devons nous appuyer。「これらが、我々がよりどころとしなければならなかった事実です」によって明示されている。大過去におかれた事柄が、この非t領域で知識として捉え直され、捜査、推理の判断材料として提示される。

例13) Aussi discrètement que possible, Scotland Yard tenta d'éclaircir les rumeurs lui attribuant une liaison avec la fille du médecin ; mais il apparut qu'après avoir été très liés, ils s'étaient brouillés brusquement deux mois auparavant, et ne s'étaient pas revus depuis. Quant au médecin, homme d'un certain âge et au-dessus de tout soupçon, il fut abasourdi en apprenant le résultat de l'autopsie. Appelé aux alentours de minuit, il avait trouvé trois personnes indisposées. Mesurant aussitôt la gravité de Mme Jones, il avait envoyé chercher au dispensaire des pilules opiacées pour alléger ses souffrances. Cependant, en dépit de ses efforts, la malheureuse avait succombé sans qu'il eût un instant soupçonné quoi que ce soit. Il était convaincu que sa mort était due à une forme de botulisme. Le dîner s'était composé de homard en conserve, salade, fromage, pain et pudding. Par malheur, le homard avait été mangé jusqu'à la dernière miette, et la boîte de conserve jetée aux ordures. Il avait interrogé la jeune bonne, Gladys Linch. Non sans peine car elle était bouleversée, agitée et larmoyante. Mais elle n'avait pas cessé de répéter que la boîte n'était pas déformée et que le homard lui avait paru tout à fait bien.

« Tels étaient les faits sur lesquels nous devons nous appuyer. [...] »

ここで、大過去は非t領域のもとに事態を置くことしかしないということに注意したい。大過去は「 $t_1$ までには、 $t_2$ のような事態があった」、「 $t_1$ に関する知識として $t_2$ がある」ということしか示さない。例13の大過去の連なりは事態を列挙しているに過ぎない。複数の大過去を重ねても物語の時間は進まず、 $t_1$ の背景知識が増えるだけである<sup>4</sup>。

次の例14では、大過去の表す事態は必ずしも生起順に述べられてはいない。4と6は同じ事態

を二度述べている。事態の生起時点 $t_2$ はもはや重要ではないということである。非 $t$ 領域で解釈されることで時間性を失っていることが確認できる。これらの事態は、その生起時をいったん離れ、記憶に収められ、同列に置かれた後、事件を再構成し、判断するために必要な知識として述べられている。大過去は、「話の続き」、「妙なこと」の構成要素を示しており、生起順ではなく、話者の思考の順を追っている。この例で大過去が述べているのは、「過去時 $t_1$ （事件の発覚時、捜査時）までには、 $t_2$ （群）のような事態があった」、「推理するには、 $t_2$ （群）の事態を考慮に入れよ」ということである。

例14) -Je pense qu'il faut attendre **la suite**, intervint sir Henry.

-Oui, confirma le Dr Lloyd, il faut attendre **la suite**. À ce moment-là, **il y avait quelque chose d'étrange**. Évidemment, j'avais posé(1) des questions aux pêcheurs, à tous ceux qui avaient été(2) témoins de l'accident. Une femme m'avait raconté(3) une histoire bizarre à laquelle je n'avais pas prêté(4) attention sur le coup, mais qui me revint plus tard. Elle prétendait qu'au moment où elle avait hélé(5) son amie, Mlle Durant n'était pas en difficulté. D'après elle, l'autre l'aurait rejointe et lui aurait délibérément maintenu la tête sous l'eau. Comme je vous l'ai dit, je n'avais pas fait(6) très attention à cette histoire. C'était si extravagant et, vues de la plage, les choses peuvent paraître si différentes ! Mlle Barton avait peut-être tenté(7) de faire perdre conscience à son amie en voyant que celle-ci allait les faire couler toutes les deux dans son affolement.

次の例でも、大過去の表す事態は必ずしも生起順に述べられてはいない。Denis Dacreがゴルフ場に行ったのは、夫人が「寒すぎはしない」と言ったのよりも後である。事態の生起順はもはや重要ではなく、複数の事態が同列に置かれている。「記事が報じている事件の構成要素としてはこのようなものがある」として、事件を再構成し、判断するために必要な知識が大過去で列挙されているのである。

例15) -Si c'est tout, déclara Raymond West comme Joyce s'arrêtait, je peux vous donner d'ores et déjà mon verdict : indigestion, taches devant les yeux après les repas.

-Ce n'est pas tout, dit Joyce. Écoutez la suite. Je la découvris deux jours après, dans les journaux sous le titre de *Baignade fatale*. **L'article** relatait comment Mme Dacre, l'épouse du capitaine Denis Dacre, s'était malheureusement noyée dans la crique de Landeer, un peu plus loin sur la côte. Son mari et elle s'étaient

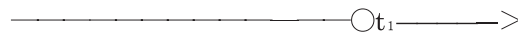
installés là à l'hôtel et avaient manifesté l'intention de se baigner, mais un vent froid s'était levé. Le capitaine Dacre avait estimé qu'il faisait trop froid pour lui et il s'était rendu, en compagnie de quelques autres personnes de l'hôtel, sur le terrain de golf voisin. Cependant, Mrs Dacre avait déclaré qu'il ne faisait pas trop froid pour elle et elle était partie seule vers la crique. [...]

大過去は、「事実群 les faits」「続き la suite」「記事 l'article」などの語句がテーマとなって開かれた非t領域に、関連する事態を列挙しているだけだが、例えば「記事を説明している」と読むことができる。

一回的に生起する事態が、大過去におかれることで、他の事態に何らかの解説を与える文になる仕組みは次のように説明される。

事態 se casser la cheville「足首を折る」は、一時点で成立し、出来事と捉えられやすい。「叫び声をあげる」pousser un criも同様である。

図7 « Il a poussé (t<sub>1</sub>) un cri. » (複合過去)「叫び声をあげた」



この二つの事態は図8のように表すことができるが、この場合、それぞれの出来事を別個に述べるのみで、互いの関連については何も言われていない。

図8 Il s'est cassée (t<sub>2</sub>) (複合過去) la cheville. Il a poussé (t<sub>1</sub>) (複合過去) un cri, parce qu'il avait très mal.



だが、大過去を使って次の(16)のようにするとt<sub>2</sub>が単独の出来事を表すことはなくなる。大過去の形態が「t<sub>1</sub>を参照し、t<sub>1</sub>に関連付けて解釈せよ」という指令だからである。t<sub>2</sub>がt<sub>1</sub>と同一の非t領域で解釈されることで、「t<sub>1</sub>と関係のある知識=説明」と読まれることになる。

例16) Il a poussé (t<sub>1</sub>) (複合過去) un cri, parce qu'il avait très mal. Il s'était cassée (t<sub>2</sub>) (大過去) la cheville.

「彼は叫び声をあげた。とても痛かったから。足首を骨折していたのだ。」

図9



説明する対象になっている、「彼が叫び声をあげた」状況 $t_1$ が共有されている。領域は予め $t_1$ を包括しており、 $t_2$ は $t_1$ を考慮に入れて解釈される。「足首を折った」という出来事が「（叫び声をあげたのは）足首を折っていたのである」という命題として捉えなおされるのである。

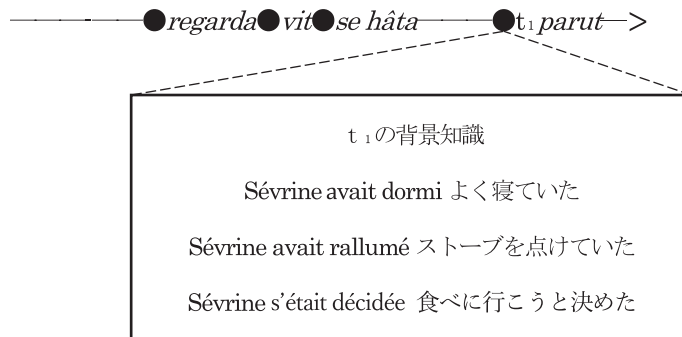
説明の大過去が「未完了相に捉えなおされる」のは、一時点に生起する事態が、他の事態を考慮に入れる非領域で、時間性を外されて知識として解釈されることによる。大過去を用いることで、 $t_1$ の状況をテーマとして、何らかの命題を述べることができるようになる。このようにして状況の説明、背景知識と解釈されることになる。非領域では、事態は領域全体において有効である。この点で、領域の一時空だけで成立する事態を表す文、つまり出来事文とは異なる。一時空に限定された出来事文では、「Aについて、Bである」のような複数の事象の関連を述べることはできない。

先行性、フラッシュバックの用法も、「説明の大過去」と同様に説明される。

例17) Jaques *regarda* sa montre, *vit* qu'il était quatre heures déjà ; il *se hâta* de retourner à l'impassé d'Amsterdam.

Jusqu'à midi, Sévrine avait dormi profondément. Ensuite, réveillée, surprise de ne pas le voir là encore, elle avait rallumé le poêle ; et, vêtue enfin, mourant d'inanition, elle s'était décidée, vers deux heures, à descendre manger dans un restaurant du voisinage. Lorsque Jacques parut, elle venait de remonter après avoir fait quelques courses.

図10





単純過去Jacques regarda「ジャックは見た」で始まる段落では、単純過去の連続が話を進めている。「主となる語り」の流れである。

二段落目は大過去が連続して出てくるが、単純過去と異なり、これらは話を進めない。後に提示される $t_1$ （単純過去のJacques *parut*）を待つ大過去である。言表される事態は $t_1$ を解釈するうえで必要な背景知識として提示される。

大過去は、読者が $t_1$ の事態が出来るまでに知っておかなければならないことを列挙しているに過ぎない。Jusqu'à midi「正午まで」、ensuite「それから」、vers deux heures「二時ごろ」という表現で、各々の時間が示されるが、それはこれらの事態にとって付随的な情報である。重要なのは、「 $t_1$ までにこれらのことが起こっていて、 $t_1$ はそれを踏まえてこのような状況になっている」ということである。 $t_1$ の「ジャックが現れた」状況で、既にセヴリーヌがこれらのことを済ませていたということが伝達されればそれで良い。これらの事態は、 $t_1$ の時点までのセヴリーヌの**特徴づけ**として働く<sup>5</sup>。

例18では、「妻を殺した男を思い出した」をきっかけにして、エピソードが述べられるのだが、このテーマが非 $t$ 領域を設定する。大過去はこの「妻を殺した男」というテーマについて重要な部分のみ、**特徴となるもののみ**を提示する。

例18) Je me rappelleis Walter Hones, le patron de *L'Homme Vert*. Un soir qu'il rentrait chez lui à pied avec sa femme, celle-ci était tombée dans le fleuve et lui, il avait touché l'assurance !

これらの大過去は、 $t_2$ という一時点に限定された $t$ 領域ではなく、「 $t_1$ に関する背景知識」という、時間性のない非 $t$ 領域の中で解釈されるものである。

大過去はもともと非 $t$ 領域で解釈される時制であるが、「完了用法」では、登場人物の知覚の範囲による「切り出し」が行われるため、「一時点 $t_1$ の状態」が表されることになる。下線部の大過去は、前の段落の単純過去il reçut un coup violent「強い衝撃を受けた」の時点 $t_1$ での状態を表している。

これは一見、時間性がないということに反しているようだが、そうではない。 $t_2$ の結果状態が、 $t_1$ に置かれた主体の知覚の範囲で、いわば切り出されることによるものである。大過去が表す状態は、 $t_1$ の以前も以降も続いている。「黄色くなって泥のように汚れている」という肌の状態は見る前からあり、これからもそうであり続ける。大過去は $t_1$ で知覚されてはいるが、 $t_1$ の時点に

限られない、Camilleの遺体の状態、属性を表している。

例19) Le lendemain, comme il (=Laurent) entrait à la Morgue, *il reçut un coup violent* dans la poitrine : en face de lui, sur une dalle, Camille le regardait[...]  
Camille était ignoble. Il avait séjourné quinze jours dans l'eau. Sa face était encore ferme et rigide; les traits s'étaient conservés, la peau avait seulement pris une teinte jaunâtre et boueuse.

図11



完了・叙想性と、先行性・フラッシュバックの、いずれもが、「結果状態、属性」として表される非t領域で解釈され、時間性は解除される。大過去は属性付与文であるといえることができる。

領域の考え方をを用いることで、叙想性、先行性がこのようにして、中心的な用法である完了用法と、統一的に説明される。このことは仮説1のようにまとめられる。

**仮説1**：大過去は出来事表せず、属性を表すものである。動詞（過去分詞）の表す事態の生起時点 $t_2$ の時間性は非常に薄い。大過去の形態自体には時間性を示すものではなく、 $t_1$ と同一の非t領域で解釈されることのみが書き込まれている。

大過去が解釈される領域は、予め $t_1$ を含む非t領域で $t_2$ は、 $t_1$ に関連する知識、 $t_1$ の属性、 $t_1$ 解釈時に必要な背景知識として解釈される。

ここで岸（2018b）での仮説を修正したい。岸（2018b）では、「大過去は、 $t_1$ と $t_2$ のいずれをも活性化させ尚且つ互いを関連付けて解釈せよという指令である」という仮説を立てた。しかし、 $t_1$ の重要性、 $t_2$ の $t_1$ への従属から、 $t_2$ は活性化されていないのではないかと考えられる。これを受け、次のように修正する。

**仮説2**：大過去は「 $t_1$ に関連のあるものとして $t_2$ を非t領域で解釈せよ」という指令である。

## 5. おわりに

本稿では、大過去の多様に見える用法を、領域という概念を用いて統一的に説明することを目指した。次のようなことを見た。

- ・大過去は、事態 $t_2$ の生起を表す出来事文ではない。
  - ・大過去は中心場面を設定せず、常に $t_1$ に従属するものとして $t_2$ を表す。
  - ・大過去は、非 $t$ 領域で解釈される。語彙の意味が一回的な動作を指すものであっても、時間性が取り去られ、属性として捉え直される。
- そのうえで、次のように主張する。
- ・大過去の形態自体が伝達する意味：「 $t_1$ に関連のあるものとして非 $t$ 領域で $t_2$ を解釈せよ」
  - ・ $t_2$ は、 $t_1$ に関連する知識、 $t_1$ の属性、 $t_1$ 解釈時に必要な背景知識として解釈される。

## 注

1. 完了アスペクトから未完了アスペクトへの捉え直しは、日本語の「テイル」にも同様のことが見られる。タ形を用いた「あの男は人を殺した」は事態を外側から全体的にとらえた完了アスペクトであるが、言語外現実では同じ事態を「あの男は人を殺している」と未完了アスペクトで捉えることも可能である。この場合「人を殺している」は、「あの男」全体に有効な「あの男」の属性を表すものとなる。
2. 朝倉委雄「フランス文法辞典」(1955)白水社、朝倉委雄、木下光一「新フランス文法辞典」(2002)白水社
3. 属性付与文と時間性の希薄さの関連は、金水(2001)でも指摘されている。「静的述語文(=本稿での属性付与文に相当)が表す状態は、むしろ話し手の知識とは無関係に、それが真である期間、「特性」として存在している。「特性」は、いわば“もの”としての性質を持って、存在しているといつてよい。「もの」は出来事と違って、時間を超越しているので、本来時間性を持たない。」(金水2001:p.67 強調岸)
4. 例13のような大過去は「説明の大過去」と呼ばれる。後で見るように、「説明」という意味効果は $t_1$ が捜査時、推理時であり、非 $t$ 領域を統括するテーマが「よりどころとなる事実群」であることからくると考える。
5. 二段落目が与える、かいつまんで要点だけを述べているという印象にも注目できるだろう。一段落目は3つのジャックの動作をregarada「時計を見た」、vit「4時だと分かった」、se hâta

「急いだ」と細かく追っているが、これらはごく短い時間に次々生起する事態である。二段落目は同じく3つの事態が大過去で表されているが、言語外現実の時間では4時間ほどの時間のことをまとめている。このような「二段落目の過去」の述べ方は、料理番組の途中で、何段階かの調理過程を端折って予めできているものを持ち出す際の「野菜を刻んで、肉と3時間煮込んで、予め室温に冷ましたものがこちらです」のような述べ方と比較できるかもしれない。時間の進行を順当に追う一段目の通常の語りと異なり、特徴的な事態をピックアップして、それらすべての事態の結果を一度に提示するものである。

## 参考文献

- 井元秀剛 (2017) 『中級フランス語 時制の謎を解く』 白水社
- 岸彩子 (2014) 「情報の全体性と部分性」『フランス語学の最前線2』 ひつじ書房 pp. 215-248
- 岸彩子 (2015) 「実体験知覚と共有知識－未来の事態を表すフランス語直接法現在形－」 和田尚明・渡邊淳也編 『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』 TAME研究会 pp. 47-73
- 岸彩子 (2018a) 「フランス語の大過去 I」 山村ひろみ編 『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』 九州大学
- 岸彩子 (2018b) 「大過去と『場』の共有」 日本フランス語フランス文学会2018年度関西支部大会 (2018年12月1日、於大阪府立大学) 発表ハンドアウト
- 金水敏 (2001) 「テンスと情報」 音声文法研究会 (編) : 『文法と音声3』 くろしお出版 pp. 55-79
- デクラーク、レナート (1994) 『現代英文法総覧』 開拓社 第3章 pp. 118-211
- 西村牧夫 (1985、2001) 「現在にかかわる大過去」『フランス語学の諸問題I』 三修社 pp. 50-62
- 西村牧夫 (2014) 「事行成立と時制構造」『フランス語学の最前線2』 ひつじ書房 pp. 89-135
- 春木仁孝 (2000) 「現代フランス語の大過去とテンス・アスペクト」『言語文化研究』 26 pp. 179-197
- 春木仁孝 (2014) 「フランス語の時制と認知モード：時間的先行性を表さない大過去を中心に」『フランス語学の最前線』 ひつじ書房 pp. 1-44
- 東郷雄二 (2011) 『中級フランス語 あらわす文法』 白水社
- 東郷雄二 (2014) 「半過去を支える解釈領域－視野狭窄の半過去を中心に」『フランス語学研究』 48 pp. 37-56
- 東郷雄二 (2018) 「談話の観点から見たフランス語の時制－大過去を中心に－」平成30年度 関西学院大学大学院「フランス文献研究1」講義ノート

- 渡邊淳也 (2014) 「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝、東郷雄二編『フランス語学の最前線2』ひつじ書房 pp. 177-213
- 渡邊淳也 (2018 a) 「フランス語の大過去Ⅱ」山村ひろみ編『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』九州大学
- 渡邊淳也 (2018 b) 「フランス語大過去形の特徴的用法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』第33号、pp. 81-112
- Barceló, G. J. et J. Bres 2006 *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys
- Carlson, G. N. 1980 *Reference to Kind in English*, Garland
- Grevisse M. et A. Goosse 2011 *Le Bon Usage*, 15<sup>ème</sup> édition, Duculot.
- Recanati F. 1996 “Domain of Discourse”, *Linguistics and Philosophy*, 19, pp. 445-475.
- Recanati F. 2004 *Literal Meaning*, Cambridge University Press
- Vogeleer S. 1994 « Le point de vue et les valeurs des temps verbaux », *Travaux de Linguistique* 29, pp. 39-58
- Vogeleer S. et W. De Mulder 1998, « Quand spécifique et point de vue », *Cahier Chronos* 3, pp. 213-233